

特 集**本当に安全ですか?****愛犬・愛猫の“食”を考える**

人間同様ペットの健康の源は“食”です。安全で健康に配慮した食餌は、ペットの健康には欠かせません。多くの飼い主は市販のペットフードを与えていましたが、平成19年春に、有害物質(メラミン)が混合した原料を用いて製造されたペットフードにより、米国で犬・猫の大規模な健康被害が発生しました。この問題を契機に、国内で販売されるペットフードそのものを規制する法律がないことへの不安が高まり、平成21年6月1日に、「環境省と農林水産省共管のもと、「愛がん動物用飼料の安全性の確保に関する法律(通称: ペットフード安全法)」として施行されました。お店にはさまざまなペットフードが並んでいますが、飼い主が愛犬・愛猫の健康のためにできることとは。

人間・犬・猫の必要な栄養素の違い

私たち人間と同じように、犬や猫は、脂肪、たん白質、炭水化物、ミネラル、ビタミンを食べ物から摂り入れなければ健康に生きることができません。しかし、人間と犬と猫では、必要な栄養素の割合に大きな違いがあります。炭水化物、タンパク質、脂肪は三大栄養素ですが、犬は雑食で人間よりもタンパク質の必要な割合が多いものの、三大栄養素の割合は人間と似ています。猫は肉食なので、人や犬よりもタンパク質の割合が多く必要とされています。また、人間や犬は、生理的に必要なタウリンや、ビタミンAなどを体内で作ることができるのに対して、猫は作ることができません。タウリンが欠乏すると、猫は網膜萎縮や拡張型心筋症などを引き起こすことがあります。タウリンは、魚介類や動物の内臓などに多く含まれているので、手作り食に加えると良いでしょう。また、一般的に幼犬・幼猫は成犬・成猫に比べて体重あたりの食餌エネルギーを何倍も必要です。そのため、成犬用・成猫用のフードを幼犬・幼猫に与えると栄養不足になり、その逆はエネルギー過剰になり肥満になります。このため、ライフステージごとのフードを食べさせることは重要です。

**ライフステージ別の区分**

犬や猫では、成長段階によって、必要とするエネルギーの量が違います。このため、市販のペットフードの多くは、ライフステージに合わせた栄養構成になっています。哺乳期は、生まれてから30日程度までの期間をいいます。この時期は母乳で成長します。市販のミルクを利用する場合には、犬には犬用、猫には猫用のミルクを与えます。離乳期は、生後約20日から60日くらいまでの期間をいいます。犬用や猫用の離乳期用フードも販売されていますが、これらが手に入らない場合には、子犬用(成長期犬用)や子猫用(成長期猫用)フードをお湯やミルクでふやかして与えることができます。成長期は、小型犬では生後約50日から10ヶ月程度、中型犬では生後約50日から1年程度、大型犬では生後約50日から1年半程度、超大型犬では生後約50日から2年程度、猫では生後約50日から1年程度の期間をいいます。市販製品では、子犬用(成長期犬用)、または、子猫用(成長期猫用)のフードがあります。成犬・成猫期は、成長期以降の7年間程度の時期をいいます。市販製品では、成犬用、または、成猫用のフードがあります。高齢犬・高齢猫は、約7歳から8歳以降の時期をいいます。(老化的スピードには個体差があるため、すべての犬や猫がこの時期から高齢犬・高齢猫というわけではありません。) 市販製品では、シニア用のフードがあります。

フードの与え方

犬の食餌の回数は、犬は1回で1日分の量のフードを食べることが出来るほど大きい胃を持っていますが、1日分のフードを1回で与えるというやり方はあまり好ましくありません。与える回数が1日1回だけの場合は、慌てて飲み込んで喉を詰まらせたり、肥満になりやすいともいわれることから、成犬では1日分を2回に分けて与えましょう。子犬の場合は、1回に食べられる量が少ないため、4回程度に分けて与えましょう。また、新鮮な水を常にフードのそばに置いておきましょう。猫は、昼夜を問わずに頻繁に少量ずつ食べる習性があるため、1日分を2~3回に分けて与えるか、腐敗の危険性が低いドライフードを置き餌として使って、いつでも食べることが出来るようにしておきましょう。ただし、置き餌の場合でも、常に清潔で新鮮な状態にし、衛生を保つことが重要です。水分の多いウェットフードや手づくりのフードなどは、そのまま放置しておくと腐りやすいため、食べ残しはそのままにしないで、すぐ片付けましょう。

**犬・猫は人間以上に塩分の摂りすぎに注意! 犬は甘い物にも注意!**

一般的に、犬や猫が1日に摂る食塩の量は人間の1/3程度でよいといわれています。このため、人間が普通に食べている食品を与えてしまうと、知らない間に塩分の摂取量が過剰となり、心臓や腎臓に負担をかけてしまうことになります。また、猫は食べ物の甘みを感じることが出来ませんが、犬は甘みのある食べ物が大好きそのため、与えすぎると肥満の原因になります。

体調管理

犬や猫も人間と同じように、痩せすぎ・太りすぎは、よくありません。大きくなるのが嫌だといって、成長のために多くのカロリーを必要とする子犬や子猫に与える量を制限したり、喜ぶからといってフードを与えすぎたり、おやつは“別腹”ではカロリーオーバーになります。カロリーの必要量はライフステージや体重によって異なります。犬や猫が1日に必要なカロリー量は体重によって変化します。また、同じ体重の犬や猫でも、ステージによって必要なカロリー量は変化します。多くの市販のフードには、カロリー表示とともに、与える量の目安が示されています。しかし、同じ量のご飯を食べても太らない人や太ってしまう人がいるように、犬や猫も個体によって必要なカロリー量が違います。目安だけに頼らず、散歩等の運動量、体調などを良く観察して与える量を調節しましょう。

レギュラーフードとプレミアムフード

市販のペットフードの中にプレミアムと表示した製品がありますが、通常のフードとどこが違うのでしょうか? レギュラーフードはスーパー・ホームセンターなどで売られ、一般的に普及しているものです。それに対してプレミアムフードは、ペットショップや動物病院で扱われていることが多く、素材・品質・栄養・バランスなど、こだわって作られています。その分レギュラーフードに比べて、価格が高くなっていますが、プレミアムフードの定義は必ずしも決まっているものではありません。一般的には、消化性やアミノ酸のバランスが優れた原料を使用している、尿路結石や毛玉の抑制、関節の保護、老化の防止などに有効と思われる機能性を持つ原料を使用しているなど、通常のフードと差別化を図った製品群を指しています。しかし、ナチュラルとか自然等と謳い、プレミアムと表記されていても、到底ありえない低価格のプレミアムもどきなフードも存在します。原材料が国産、人間の食するものと同じであったり、安全基準が人と同じであるフードは、消費者である飼い主にも見えやすい材料で作られているため安心して購入することが出来ます。また、原材料の表記は、内容量の割合が多い順番になっているので、原材料表記のトップに鶏肉粉とか副産物ではなく『肉』となっていることも、良いフードであるとのひとつの目安です。しかし、一般的には、どんな原料を使用し、食肉はどの部位を使用しているか、安全な飼育や栽培がなされているかなど、明記されていないことが多く、飼い主が最低基準を決めてしっかり吟味することをお勧めします。他には、フードの良し悪しは、ペットの便を見て判断することもできます。一般的なペットフードの原材料は、大半が穀類で占められていますが、穀類は炭水化物であり、分解吸収に時間がかかります。炭水化物はいわゆるデンプンで、エネルギー源として大変重要な栄養素ですが、加工する前の原材料の細粒化が大切です。家畜飼料としてのトウモロコシは外皮から芯に至るまでをいいますが、犬や猫は、牛などの草食動物に比べて消化器官の長さが1/5ほどしかないため、実(種子)以外も含んでいるフードは、大半が未消化で排泄され、便の量が多くなります。犬猫の便量が多い場合は、ペットにとって消化しにくい物質が多く使用されているフードだと疑ってかかる必要です。良質なフードほど“便”的量が少ないので、さらに、酸化予防のため袋が二重の構造になっているものや、酸化防止用素材の袋を使っているものも安心です。店頭にはさまざまなペットフードが並び、本当に難しいフード選びですが、飼い主として正しい食知識や良質のフードの選択眼を身につけたいものです。愛犬・愛猫の健康を一番に考えてあげられるのは飼い主さんです。

**安心で安全な
信頼できるフードを**

**与えてはいけないもの・注意が必要なもの**

玉葱は犬猫に有害な成分が含まれ、大量に食べさせると赤血球が破壊され、血尿、下痢、嘔吐、発熱などのおそれがあります。加熱しても有害成分は分解されず、加工食品や煮汁にもエキスが含まれるので、注意が必要です。(長葱、ニラ、ニンニクにも含まれる。)**ブドウ・干レブドウ**は腎不全の原因となり、特にブドウの皮はNGです。**キシリトール**は、少量でも犬が食べると血糖値の低下や嘔吐、肝不全などを起こすので注意が必要です。**香辛料**は犬猫は耐性が低いので、肝臓障害の症状を引き起こします。**鶏の骨**は縦にさけやすく、喉や消化管を傷つけるで危険です。**生魚・イカやタコ**などは消化が悪いので、下痢や嘔吐の原因になり、喉に詰まらせることがあります。また、**生イカ・貝などの魚介類**や、**カニ・エビなどの甲殻類**はビタミンB1を分解する酵素を含んでいるため、猫に与えると体内のビタミンB1が不足して後脚の麻痺を起こします。(加熱調理後はOK)**ホウレン草**はシウ酸が多く含まれているため、シウ酸カルシウム尿石症の原因になります。**生の豆やナッツ類**は、消化が悪いので、下痢や嘔吐の原因に。犬に**チョコレート**を与えると、テオブロミンが原因で嘔吐、下痢、発熱、けいれんの発作などを起こします。(猫も起ることがあります。)**コーヒー・緑茶**には、カフェインが含まれているため、これらの飲料を与えると、犬や猫は、下痢、嘔吐、体温不調、多尿、尿失禁、テンカンの発作などを起すことがあります。**生卵**は、アビジンという酵素が、皮膚炎、成長不良の症状を引き起こすことがあります。(加熱調理後はOK)**砂糖**は、糖質吸収などのため、ビタミンB1やカルシウムが余分に使われ、ビタミンB1欠乏症やカルシウム不足の症状を引き起こすことがあります。**煮干し・海苔**は、犬や猫には、マグネシウムの過剰が要因となり尿路疾患を引き起こすことがあります。**米飯**は、カロリーは十分に含まれていますが、ビタミン、ミネラルが少ないため、猫には、成長不良、肥満の症状を引き起こすことがあります。**レバー**は、猫には、ビタミンA、Dの過剰が要因となり、食欲不振、関節炎を引き起こすことがあります。